



レコード会社に勤務する葛西泉(菅田将暉)と、
ピアノ教室を営む母・百合子(原田美枝子)。
ふたりは、過去のある「事件」をきっかけに、
互いの心の溝を埋められないまま過ごしてきた。

そんな中、突然、百合子が不可解な言葉を発するようになる。
「半分の花火が見たい……」
それは、母が息子を忘れていく日々の始まりだった。

認知症と診断され、次第にピアノも弾けなくなっていく百合子。
やがて、泉の妻・香織(長澤まさみ)の名前さえ分からなくなってしまう。
皮肉なこと、百合子が記憶を失うたびに、泉は母との思い出を蘇らせていく。
そして、母子としての時間を取り戻すかのように、泉は母を支えていこうとする。

だがある日、泉は百合子の部屋で一冊の「日記」を見つけてしまう。
そこに綴られていたのは、泉が知らなかった母の「秘密」。あの「事件」の真相だった。

母の記憶が消えゆくなか、泉は封印された記憶に手を伸ばす。
一方、百合子は「半分の花火が見たい…」と繰り返すつづやくようになる。

「半分の花火」とはなにか？
ふたりが「半分の花火」を目にして、その「謎」が解けたとき、
息子は母の本当の愛を知ることとなる——

半分の花火

菅田将暉 原田美枝子 長澤まさみ / 北村有起哉 岡山天音 河合優実 長塚圭史 板谷由夏 神野三鈴 / 永瀬正敏

監督: 川村元気 脚本: 平瀬謙太郎 川村元気 音楽: 網守将平 原作: 「百花」川村元気(文春文庫刊)

製作: 松岡宏泰 共同製作: 西新 依田巽 古澤佳寛 岡田武士 渡辺章仁 弓矢政法 潮田一 今村俊昭 広田勝己 奥村景二 鈴木貴幸 中部嘉人
エグゼクティブ・プロデューサー: 白井央 小竹里美 プロデューサー: 山田兼司 伊藤太一 ラインプロデューサー: 横井義人 撮影: 今村圭佑 照明: 平山達弥 録音: 矢野正人 美術: 杉本亮

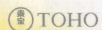
装飾: 茂木豊 編集: 瀬谷さくら スタイリスト: 伊賀大介 荒木里江 ヘアメイクデザイン: 勇見勝彦 キャスティング: 田端利江 音響効果: 北田雅也

監督補: 平瀬謙太郎 助監督: 中里洋一 制作担当: 菅井俊哉 音楽プロデューサー: 成川沙世子 宣伝プロデューサー: 宮千香子 メディアプロモーション: 秋山智美 上野美穂

製作: 東宝 テレビ朝日 ギャガ STORY ユニバーサルミュージック EMI Records ローソンエンタテインメント

ジェイアール東日本企画 A01 Pro. 朝日放送テレビ 毎日新聞社 日本出版販売 Filmarks 文藝春秋

制作プロダクション: A01 Pro. 配給: 東宝 海外配給: GAGA ©2022「百花」製作委員会



凝縮された美しさ。奇想天外な物語がある一方、誰もが身に覚えのあるような身近なストーリーもある。認知症がじわじわと進行しつつある母親に、出産を控えた息子夫婦が向き合う、という誰にとっても身につまされるような、悪く言えば日常的なドラマを、思い切って凝縮してみる、何百気圧のプレッシャーをかけてギュウギュウ圧縮すると、透明なキラキラした美しい結晶体に変化する。川村監督の『百花』はそんな映画だ。ワンシーンワンカットで撮影された、いわば「長回し」の大胆な演出スタイルが不思議に飽きさせない。うまい演出とは云いたくない、この作品の力はスタイルではなく、このドラマにかけた監督のエネルギー、情念、憧れ、愛情、といったもの、つまりハートなのだということをしみじみ思わせてくれたし、実は初演出の川村元気君自身が完成した作品を見てそのことに気づき、衝撃的に思いあたっているに違いない。「カットとカットの間に神が宿るんだ、それが映画というもんだよ」と、ぼくに語ってくれた黒澤明監督の温顔をしみじみ思い出す。

山田洋次

映画監督

母の記憶とリンクするピアノ曲と抑制された音楽と。本当に久しぶりに映画に浸った。

鈴木敏夫

スタジオジブリ・プロデューサー

記憶とは歪んだイビツな鏡なのかも知れない。母にとって小さな湖が、海と映る。果てなく大きな存在が母であるその息子の鏡には。

岩井俊二

映画監督



この美しい映画を私に見せてくれて、ありがとうございました。監督は時代を超えた母と子の物語を作りましたね。泉と百合子の関係には、痛み、後悔、罪悪感、そして最終的には血の通った人間関係の愛がすべて含まれています。二人とも自分勝手でお互いに優しくなれないのにもかかわらず、二人に対する同情や憐憫は揺るぎません。これは、監督が登場人物の記憶と感情を巧みに織り込んでいるからこそでしょう。そして、それらの感情の多くは、黄色い花を贈ること、釣りに行った時の記憶、花火を驚嘆しながら見ることなど、些細ながらも象徴的な瞬間に作られています。すごい!この映画は、本当の詩のようです。

ニコール・キッドマン

俳優

もしも大切な思い出をぜんぶ泥棒に盗まれたとしたら、私は生きて行く価値のない人間になるだろうか。いや、そんなことはない。思い出がなくても今がある。今を生きることになろう。この映画を観て、私はそんなことを思った。

阿川佐和子

作家・エッセイスト

映画は最初から野心的であざやかだった。絶妙なロングショットは、非常に繊細かつ鋭敏に演出されていて、最後まで緊張感が続く。何よりも感動したのは、映画の後半で、主人公の泉が母の百合子に「なんで忘れてんだよ、こっちは忘れらんねえんだよ」と叫ぶ場面。そしてラストに、母親が求める「半分の花火」が何だったのか、その本当の意味に彼が気づく。なんと感動する瞬間なのか。改めて、息子と母の親子関係の本質を力強く感動的に描いた作品だ。素晴らしい作品を見せてくれたことに、感謝を伝えたい。

ポン・ジュノ

映画監督